

# 比丘の戒体発得と受具について

佐々木教悟

釈尊の正法が誤まりなく維持され伝承されてゆくためには、正当な僧伽が樹立されていることが不可欠のことであった。そして、その僧伽樹立の基礎となったものは、釈尊自身の菩提樹下における大悟、すなわち自具足 *svam-upasampada*<sup>1</sup> と、鹿野苑における五比丘の帰依、すなわち善来比丘具足 *ehibhikkhu-upasampada* とであったとかがえられる。その理由は、釈尊の成道ということによって、佛陀が世に出現し、地上の世界に正法が初めてあらわれることになったのであり、初転法輪時における憍陳如 *Kondanna* 等の五比丘の帰依ということによって、正法を実践する佛弟子の集りが地上の世界に初めて出現することになったからである。

前者は

世尊在菩提樹下。最後心廓然大悟。自覺妙証善具足。如線經中広説。是名自具足。<sup>(1)</sup>  
後者は

佛言<sup>下</sup>善来比丘受具足戒<sup>一</sup>。於<sup>ニ</sup>我善說法律<sup>一</sup>能尽<sup>ニ</sup>一切苦<sup>一</sup>淨修梵行<sup>上</sup>。橋陳如鬚髮自墮。袈裟著<sup>レ</sup>身鉢孟在<sup>レ</sup>手。是為<sup>下</sup>橋陳如已得<sup>ニ</sup>出家<sup>一</sup>受具足戒<sup>上</sup>。<sup>(2)</sup>

の記述のよく示すがごとくである。

ところで、上記の文中にあげられている具足あるいは受具足戒とよばれる語は、そのちにおける佛教の僧伽にとって、比丘の生命を左右するほどの重要な意味をもつものとなったが、比丘の戒体を論ずるにあたっては、その原意を明かにしておく必要があるとおもわれる。具足あるいは受具足戒と訳されている語の原語は、ウパサンパッド *upasanpada* (*upa + san + pad*, Tib. *bsñen par rdsogs pa*) であるが、通常は *upasanpada*, *upasampada* のかたちのものが多く用いられている。

このように諸律の訳語をあげてみるならば、およそつぎのごとくである。

具足 摩訶僧祇律卷二十三、大正二二、四一二中

受具足 摩訶僧祇律卷二十三、大正二二、四一三上、十誦律卷二十一、大正二三、一四八中。

受具足戒 五分律卷十五、大正二三、一〇五上、四分律卷三十二、大正二二、七八九上、十誦律卷二十一、大正二三、一四八中、善見律毘婆沙卷十六、大正二四、七八九中

授具足戒 善見律毘婆沙卷十六、大正二四、七八九中

受具戒 善見律毘婆沙卷十六、大正二四、七八九中

具戒 善見律毘婆沙卷十六、大正二四、七八九下

受近円 根本説一切有部毘奈耶卷四十一、大正二三、八五三上

進具 根本説一切有部毘奈耶卷四十一、大正二三、八五三上

さて、このウパサンパダーの原意は如何んというに、説一切有部に属する梵文断片で、<sup>(3)</sup> 受具足戒の律母 *vinaya-*

matika の説明文の中につきのごとき文が存する。

Upasampadā katamā upētya saṃpādayanti upasampadā

ウパサンパダーとは如何ん。近づいて、具足する、その故に受具足である。

ここに、近づいて upētya というのは、世尊（ゴータマ・ブッダ）の許に近づいてということであり、また同時に涅槃に近づいてということであり、そのことは、かの長部經典の迦葉師子吼經 Kassapaśihanadasutta<sup>(4)</sup> に説かれている事例にしたがえば、かつて異教の徒であったものが、この法と律との最勝なることを知って、世尊の許で出家を願ひ、ウパサンパダーを受けようと願うときは、四ヵ月間別住することをおしえられる。四ヵ月経過の後、比丘衆の同意があれば、かれは出家することができ、ウパサンパダーを受けて比丘たることの資格をそなえることができるとされたのである。この際、四ヵ月という期間は人によって差異のあることが認められている。すなわち、四ヵ月でなく四年間別に住んで、もうよろしいということになれば、そこで出家してウパサンパダーを受けることが許される。そのことは異教・異説の徒であったものが、徐徐に世尊の許に近づき世尊の説きたもう涅槃に近づき、ついに佛教の僧伽の一員として認められるにいたることを意味している。それが、つぎの具足する saṃpādayanti という語で示されているとかがえられる。

このようにして、たとい異教徒であっても、佛教において出家しようと発心して具足戒を受けたならば、その志望者 upampadapekha は、比丘性 bhikkhu-bhava を獲得することになるのであり、若しもそのような具足戒を受けないで、比丘の着用する黄衣 cīvara を身にまとい、僧伽にまぎれこむような者があれば、その人はいわゆる賊住の比丘 theyyasaṃvāsaka bhikkhu と呼ばれ、もちろん僧伽からは排除せられ、永久に具足戒を受ける資格をもたないものとされたのであった。

賊住比丘については、十誦律卷一に名字比丘、自言比丘、為乞比丘、破煩惱比丘なる四種の比丘をあげる中、自言比丘といわれているのがそれにあたっている。

又復賊住比丘。剃除鬚髮、被著袈裟。自言、我是比丘。是名自言比丘。<sup>(5)</sup>

この賊住の比丘が実際に存在したことについては、かの島王統史 *Dipavamsa* や大王統史 *Mahāvamsa* が述べており、<sup>(6)</sup> 一般のよく知るところとなっている。すなわち、かのアショーカ王 (*Aśoka*, B.C. 268~232c.) の治世に、ただ生活上の利得を得んがために、佛教の僧伽に加わってきた異教の徒が増加して、その当時における重要な僧伽の拠点でもあったパータリプトラ *Pataliputra* の阿育園精舎 *Asokārāma* においてさえ毎月の布薩が行われなくなったことが報告されている。

僧伽の戒律や修行が乱れ、正當な僧伽羯磨 *Samghakamma* が行われなくなるということは、僧伽にとって致命的な事柄であることはあらためていうまでもない。したがって律藏の大品 *Mahāvagga* には、大鍵度 *Mahakhanda* をはじめとし、布薩鍵度 *Uposathakhandaka* その他諸鍵度<sup>(7)</sup>に、外道に帰せる者、畜生、殺母者、殺父者、殺阿羅漢者、比丘尼を汚せる者、破和合僧者、佛身より血を出せる者、二根者などとともにこの賊住者をあげて、賊住者の混入、介入を斥けるという留意がなされていることを知るのである。いずれにしても、物質的に安樂に生活し困憊することがないということに心をひかれて

彼沙門釈子等は、戒易くして好食を食い風のいたらざる臥具に臥す。我当に自ら鉢衣を調へ、鬚髮を除き、袈裟衣を著け、〔僧〕園に往きて、比丘等と俱に住すべし。<sup>(8)</sup>

といった利養を目的とするものを、眞正の僧伽が歓迎する筈はなく、かれらに具足戒を授けることを禁じ、すでに具

足戒を受けたる者に対しては滅擯 *pabbājanīya*、すなわち僧伽から放逐するという厳しい処置がとられたのであった。かの破僧伽に関するアシヨーカ王の法勅 (*Kosambi, Sañci, Sarnath* の法勅)<sup>(9)</sup>に、僧伽を破るものとして、いわゆる賊住者とか外道とかがあげられていたと解せられており、〈僧伽の中にこれを容るべからず〉として、白衣を着用せしめて、精舎ならざる処に住せしむべきであるとされているのは、上記の事実を物語るものとかんがえられる。

なお、これらの法勅に見られる指示は、アシヨーカ王によるものであるが、その当時のモッガリプッタ長老 *Moggalliputta-thera* を首座とする僧伽自体の見解でもあり処置でもあったと見なくてはならない。かの律蔵の附随 *parivāra* に、賊住者および外道に帰入せる者、破僧等をあげ、たといかれらを受具せしめても、その事 *vattu* は不成にして非法羯磨 *adhammakamma* であるとする見解が示されているのである。<sup>(10)</sup> そしてこのような諸点に留意して、佛教において出家する人は、その出家者としてのふさわしい形をとること、また僧伽の生命ともいふべき和合の精神を喪失しないこと、およびこれらの点について具体的に且つ懇切に教授し指導する役目になうところの師匠をもつことが不可欠な要件とされたのであった。かのパーリ律の註釈であるサマンタパーサーディカー *Samantapāsādikā* には、受具に関連して、出家に三種の偷み<sup>(11)</sup>——形を偷む、和合を偷む、形を偷み亦和合を偷む——のあることがのべられているが、そのことはやはり現実に現われていた僧伽の実態が直視されていた証拠であるといつてよからう。

### 三

さて具足戒を受けることによって、初めて比丘たることの資格をもつとされることについては、前掲の迦葉師子吼經の記述を文証とすることができるが、それはまた經集の三の六サビヤにも同内容のものがみられ、さらに律の文獻では、パーリの經分別 (大分別) 第一波羅夷の条下に比丘の学戒を受けるといふかたちで示されていることが注目される。

すなわち、そこにいう比丘とは、自称の比丘はもとより、善来比丘、三帰により進具せる比丘よりさらに一層すすんで、和合僧の白四羯磨により遮難なく価値ありて進具を得たる義の比丘<sup>(13)</sup>が、まさしく比丘の比丘たることを意味するものとされるのである。また、ここにいう学とは、もちろん三学を意味するが、その三学は増上戒学、増上心学、増上慧学としての三学にして、その中の増上戒学がまさしくここでいわれるところの学である。さらにまた、この学戒といわれる場合の戒とは、世尊によって制せられたる学処 *śīlasāpada* のことであるから、比丘の学戒を受けること、ということは、比丘として学修すべき事柄を師匠の面前で、ないし諸比丘の間で誓言し確認することになり、そのことによって受具志望者 *upasampadapekṣā* は、ここに初めて比丘性 *bhikṣu-bhāva* を得るものとされたことが知られるのである。これがいわゆる戒体発得であるが、学者の見解によれば、戒体という用語は、シナ・日本の佛教で重要な意味を持っていた。しかしこの言葉はインド仏教ではどれだけの意味をもっていたか明かでないとし、その語が俱舍論に見当たらない点を指摘されている<sup>(14)</sup>。しかしながら、インド佛教において、なかならず戒律佛教といわれる諸部派の佛教にあつては、戒体の発得ということが重視されていたことは明かである。

かの根本説一切有部毘奈出家事卷第二には

於善法中。出家近円。成苾芻性。修持梵行。<sup>(15)</sup>

とあり、弥沙塞羯磨本には正受戒体法なる見出しのもとに受具作法がのべられ、比丘法の具得のことが説かれている。この弥沙塞羯磨本は、唐の愛同が広律中から撰出したものとされているが、受具足戒のときに初めて正しく戒体の発得があるという見解に立って、このような見出しを掲げたものとおもわれる。ところで比丘性を成ずるということは、前出の出家事において見られるように、とくに根本説一切有部において留意されていた模様で、かの根本説一切有部百一羯磨の卷一にも出ており、受具の際に成苾芻性が請い願われたことが知られる。そして一たび比丘性を成じ<sup>(17)</sup>たならば、その比丘性を失なうことのなきよう、比丘たることより墮落する *dhvāsyate bhikṣu-bhāvāt* <sup>(18)</sup>ことのなき

ように強くいましめられたあとをうかがうことができる。

根本薩婆多部律撰卷第十三の与減年者受近円学処第七十二に本人が未だ満二十歳に達していないのを知りながら、苾芻が受近円を与えて苾芻性と成す者は波逸提迦の罪を得るといましめ、その条においてとくに賊住のことを説いている点、ならびに同じく律撰卷第二の不淨行学処に五種の苾芻、七例声の苾芻義、十一種の苾芻義をあげて眞の比丘たること、すなわち白四法を以て近円を受ける者、正しく近円を受ける者が比丘の比丘たるものであるむねを説いている点が、上述のことを裏付けているようである。

そこであげる五種の苾芻とは、(一)名字苾芻、(二)自許苾芻、(三)由乞求故名爲苾芻、(四)破煩惱故名曰苾芻、(五)以白四法受近円者名爲苾芻であり、  
此中言苾芻者。意存第五。余之四種名同故来。  
とのべている。

七例声に依る苾芻義とは、(一)作者声——近円の人、(二)作業声——同じく戒を学す、(三)所由声——三業に由る、(四)所爲声——涅槃を求む、(五)所従声——師に従う等、(六)属主声——世尊の法、(七)所依声——欲界及び善説法律に依る等であるが、これに呼召声——爾来れ苾芻と喚ぶが如しを加えて八転を戒ずと説かれている。

つぎに十一種の事にて苾芻の義を積すとされるものは、(一)過去苾芻——過去において苾芻であったが、已に学処を捨てているもの、(二)未至苾芻——未受学処のもの、(三)現在苾芻——不捨学処のもの、(四)内——内煩惱を断ずるもの、(五)外——外相摂持するもの、(六)鹿——他の勧請を待つもの、また名字等の四、(七)細——能く自ら要心するもの、また破煩惱の人、(八)劣——冗雑を破する人は不常不堅等である。(九)勝——上と相翻す、(十)遠——出家に堪える人、及び始めて樂欲を生ずるもの、(出)近——正しく近円を受けるものである。

ここにあげたような、これらの釈説によって、世尊の善説法律において白四に依る受具をもって比丘性が成ぜられ

るとなされたこと、そして比丘の学処を捨てざることによって比丘義が完うされるとなされたことが知られるのである。

#### 四

このようにして正しく近円を受けることを強調するのは、たんに根本説一切有部のみではなかった。他の部派においても、それぞれの立場において受具を重んずることは同様であり、したがって受具の作法に関しても、いささかの誤まりも許されず厳密なることが要請されることになった。

さて、パーリの律蔵にもとづく上座部佛教の *Upasampada-vīdhi* に関して、その主要点とみられるものを順次にあげて考察することにした。

まず沙弥の出家を意味する *pabbajja* と、比丘となるときの *upasampada* とは明確に区別されていることに注意したい。学者の研究によれば、<sup>(21)</sup> 出家を得ることと具足戒を得ることとは、すでに阿含経でも区別されていたことが知られる。したがって在家の青年で満二十歳に達している者が比丘となろうとするときは、出家式と具足戒式を同時に行なうことになるが、この際もとても重要なことは、本人の師匠となる人があらかじめめられていなければならないことである。出家の場合の師匠は阿闍梨 *ācariya* と呼ばれ、受具の場合の師匠は親教師 *upajjhaya* と呼ばれるが、それは同一人であっても差支えない。

剃髪して出家の形相を受持すること、黄衣の受領ならびに出家ないし受具の懇請等は、かたのごとくパーリ語でなされるが、三帰と十学処を受けることは重要なポイントである。とくに三帰依文をパーリ語で唱えるに際しては、その発声が正確であり厳密であることが要請せられる。そのことは、かの善見毘婆沙卷第十六に

若師与弟子。語俱不正。言三帰依佛。不成受三帰。若師教三帰依佛。弟子答言爾。或語不出口。或逐語不



具足。皆不<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>受<sup>三</sup>三<sup>二</sup>婦<sup>一</sup>。<sup>(22)</sup>

と説かれているからである。したがって弟子が正しく明瞭に発声できるまで、師匠はいくたびも繰り返しおしえなくてはならないものとされている。三婦の受持は、それほど重要な意味をもつものである。なお、三婦依について、根本説一切有部にあっては、帰依佛陀阿足中尊、帰依達摩離欲中尊、帰依僧伽諸衆中尊なる独自の文が用いられているが、そのことはすでに別稿において注意した。<sup>(23)</sup> また三婦依を三唱あるいは三説することは、いずれの部派も行なうところであるが、それは三宝のそれぞれに三婦がなさるべきであるという見解にもとづくものである。十戒についての別受と総受とは、十学処を各学処ごとに受けるとともに、十学処を一つのものとして総じて受けることを意味するが、これも後世まで遵守されるものとなった。

受具に際して三衣及び鉢が具足していることは欠かせない条件であるが、根本説一切有部にあっては、さらに瀧水羅 *Parisāvana* と臥敷具を加えている。ところで、式中における黄衣 *ūvara* の受領に際して——それはきわめて厳肅な瞬間であるが——四資具に関する觀察自督 *catupaccaya-paccavekkhaṇā* の黄衣についての文を念誦することがおしえられる。それは中部經典の一切漏経 *Sabbāvasutta* に説かれている文にして、つぎのごときものである。

比丘は省慮によりて正しく衣服を受用す、すなわち、ただ寒暑を防がんがため、また、虻・蚊・風・熱・蛇触を防がんがため、また羞恥を与えるところの器官を蔽わんがためのみである。<sup>(24)</sup>

ここには出家者の生活態度がよく示されているようである。すなわち、比丘にとって衣服は身体を裝飾するためにあるのではなく、ただ必要のためにあるものであり、必要以上に貪り求めようとする貪欲心を除去し、貪欲心を増長せしめないようにとこころがけるものである。

つぎに、五つの業処を示す語を親教師の発声に応じて一語づつ復唱することがおこなわれる。

ケーサー (*keśā* 頭髮)、ローター (*lonā* 皮毛)、ナカー (*nakhā* 爪)、ダンター (*daṇṭā* 齒)、タチヨー (*taco* 皮膚)

そしてさらに反対の順序にもう一度復唱することがおしえられる。これは出家の生活には入るにあたって、戒律による身と心との清浄な生活が望まれてあることを銘記せしめるものといつてよからう。とくに皮膚の色つや、および爪の色を示しつつ、受具希望者に健康のことが説かれるのは、まったく合理的であるとおもわれる。もちろんこのような皮膚の業処を唱えることが、早くから行なわれていたとおもわれないし、また部派によっての作法の相異ということもあり、また親教師の意案によるところもあったとかがえられる。しかしながら南方の上座部佛教において、佛教本来のおしえを生かすかたちをもって、そのことが伝承されている事実を無視することはできないであろう。

## 五

授戒が三師七証の十人僧伽で行なわれること、ならびに白四羯磨が採用されることは、各部派とも同じであり、羯磨語の内容もほぼ同じでかわるところはないが、三師の中、親教師（和尚）を除く他の二師については、諸律において必ずしもその呼び方が一定していない。<sup>(26)</sup>

十名僧伽についても、後世の上座部では受具のごとき重要な儀式は満数として最適の二十名僧伽で行なうべきものとされており、また二師についても、羯磨師 *kammavācācariya*、教授師 *anusāvācariya* という呼称が定着するようになっている。

受具の際における主要なもう一つの点は、この教授師によって会衆 *parisa* 外のところで受具希望者について障法 *antaryāyike dhamme* が問われることである。この障法はパーリ律では十一項があげられるが、他律においては若干の出没がみられ、またその順序等にも少しく相異がある。しかしながらその内容はほぼ一致している。あらかじめこの障法について質問がなされ、障法無しとみとめられるや、会衆の席に戻って、そこで正式に一对の誦唱師なる二師によって唱尋が行なわれ、かくして白四羯磨の作法にうつるのである。

おもうにこの障法は、比丘が僧伽の一員として支障なく修道生活を行なうことができるようにとの配慮からあげられているもので、僧伽という生活共同体の維持の上からいっても必要な事柄であった。とくに父母の許しを得たかどうか、五種の病の有り無しといったようなことがその項目の中にあげられているのは、世俗の社会を離れた出家の社会をめざすものでありながら、大衆の中の佛教という一面を示すものである。ただここで重要なことは、かかる障法の質問に対して、受具希望者は正しく答えなくてはならないとされていることである。若しも真実を語らず、いつわって答えた場合には、たとい受具の羯磨が終ったとしても、それは無効で受具したことにならず、したがって比丘性を獲得することはできないのである。そこで若しも本人に障法としてあげられるような難事があるならば、そのことを本人によく自覚せしめ、難事を取り除く努力をなさしめ、難事のない身となってから受具するようにという配慮を讀みとることができるのである。

白四羯磨が終って、受具希望者は正式に比丘として承認せられ、会衆の末座にその位置を占めるが、暫時にして会衆の中央に進みいで、親教師もしくは教授師より教誡 *anusāsana* を受ける。その教誡には、太陽の影を測ること、李節を告げること、諷誦、四依法、四不応作法などの事項がふくまれるが、重要なものは四依法と四不応作法とである。<sup>(27)</sup>

この中、四依法 *cattāro nissaya dhammā* とは比丘のあるべき生活法としての基本を示したものである。すなわち、衣は糞掃衣 *paṇṣukūlacivara* に依る、食は乞食 *pindapāṭabhōjana* に依る、住は樹下住 *rukṣhamulasenāsana* に依る、薬は陳棄薬 *patimuttabhjesajja* に依るとせらるものである。<sup>(28)</sup> 十誦律の説くところにしたがえば、これらの四依によりて比丘の出家受具せるものは比丘法 *bhikkusū-dhava* を成ずとされているから、かたちの上で比丘の状態、すなわち比丘たるありかたがみられることになるであらう。

四不応作法 *cattāri akaraṇiyāni dhammā* とは比丘として絶対に作すべからざる行為とされている淫、盜、殺、

大妄語の四項目にして、その内容は比丘戒本の四波羅夷法と同じものである。したがってこの四項目のうち、いずれを行なっても比丘たることを失なうものとなるであろう。

以上の八事に関する教誡は、通常、受具とは別に切り離してかんがえられているようであるが、その意味するところからみて分離しがたいものであり、したがって受具の際に必ずこのことが教授されることになったとかんがえてよからう。

上来のべたところにより、正当な作法によって受具がなされるときに、比丘性が得られ、そこに戒体の発得があり、その戒体があることによって、いわゆる「防非止惡の力」がはたらき得るものとせられたのである。そしてその戒体は四依法や四不応作法を中心とするところの、出家者としての比丘のありかたによって維持されるというのが戒律佛教の面目であったとかんがえられるのである。

#### 註

- (1) 摩訶僧祇律卷第二十三、大正二二、四一二中—下。
- (2) 五分律卷第十五、大正二二、一〇五上。
- (3) R. Hoernele: Manuscript Remains of Buddhist Literature found in Eastern Turkestan, p. 13, 平川彰著「律藏の研究」八四頁参照。
- (4) DN. 8. 24 南伝六、二五三頁。
- (5) 十誦律卷第一、大正二三、二中。
- (6) 島王統史第七章、南伝六〇、五六頁、大王統史第五章、南伝六〇、一九四頁。
- (7) 南伝三、一四六、二一四、二九六、五三四、五五六頁等。
- (8) 律藏大品、第一大捷度、南伝三、一四六頁。
- (9) 宇井伯寿著「阿育王刻文」印度哲学研究第四、三一〇—三二三頁。
- (10) 南伝五、三八〇頁。

- (11) Samantapāsādikā Vol. V, p. 1018. 善見律毘婆沙卷第十七、大正二四、七九二上
- (12) Sn. Mahāvagga 6, Sabhiyasutta p. 102.
- (13) Vinaya, Vol. 1, p. 24, 南伝一、三七頁。
- (14) 平川彰著「原始佛教の研究」一七七頁。
- (15) 根本説一切有部毘奈耶出家事卷第二、大正二三、一〇二八上。
- (16) 弥沙塞羯磨本、大正二二、二〇上。
- (17) 根本説一切有部百一羯磨卷第一、大正二四、四五六中、四五八上。
- (18) 翻訳名義大集 No. 8422.
- (19) 根本薩婆多部律撰卷第十三、大正二四、五九七中—五九八上。
- (20) 同律撰卷第二、大正二四、五三二上—中。
- (21) 平川前同書四四二頁。
- (22) 善見律毘婆沙卷第十六、大正二四、七八八下。Samantap. Vol. V, p. 969.
- (23) 拙稿「根本説一切有部における帰依三宝について」佛教学セミナー第八号
- (24) MN. Vol. 1, p. 10, 南伝九、一三頁。
- (25) Somet P'ra Mahāsamaṇa-cau : Uṇṣampadāṇṣapṭiṇ, p. 55.
- (26) 平川前同書、四六六頁。
- (27) 佐藤密雄著「原始佛教教団の研究」二二四頁参照。cf. B. Jinananda : Uṇṣampadāṇṣapṭiṇ pp. 21-27.
- (28) 十誦律卷第二十一、大正二三、一五六下。